

コーディネーターの実践からみた 専門性形成のための視点

パネリスト：名古屋国際センター主査

東京外国語大学特任研究員／かながわ国際交流財団情報サービス課長
多言語・多文化教育研究センタープログラムコーディネーター

進行：東京外国語大学特任研究員／早稲田大学文学学術院教授

丹下厚史
小山紳一郎
杉澤経子
山西優二

山西 第2部を始めます。私たち山西・小山班の研究メンバーである丹下さん、小山さん、そして杉澤さんの3人が登壇します。私も司会をしながら話をしたいと思います。

私たちの研究では、あらためて専門性を踏まえつつ、それをどう形成していくのかということが大きな課題としてあります。こういったコーディネーター養成プログラムは、それぞれの団体や自治体によっていくつか作られています。それを分析しながら、内情はどうなっているかという研究も行っています。

今日は、まずここにいる3人が語ります。それぞれが国際交流協会などで10数年から20年ぐらいの経験を積み、コーディネーターとして専門性を蓄積してきた人たちです。これまで歩んできた経験を振り返り、その専門性をどういうプロセスで形成してきたのか、それを題材にじっくり語ってもらうことにしました。そこで出てきた視点を、今いろいろなところで作られつつある養成プログラムの分析視点としても活用しながら専門性形成の視点を絡めて、話し合っていきたいと思っています。

■人と出会い、関係をつくる—国際理解教育を事例に

丹下厚史 私は先ほど第1部で事例発表とコメントをした加藤さんと、職場が同じです。私は山西・小山班の연구원として去年から携わっています。

私のコーディネーターとしての事例は07年度活動の「シリーズ多言語・多文化協働実践研究6」のプレフォーラムの項で、ご覧いただけます。国際理解教育セミナーの事例として、県の協会、市の協会、JICAやNGOなどと協働でつってきたことを紹介しておりますので、あわせて読んでいただければと思います。

今日は「人と出会い、関係をつくる」というところを中心に話したいと思います。山西さんが提示した図(p.6)にも、下の部分に「知識」—「技能」—「価値・思い・態度」とあります。ここでは、経験を通してこういった知識、技能、価値・思い・態度という、いわゆるコーディネーターを形成する3つの形成要素についてどのように自分の中に取り込んできたのか、そういったことを中心にしたお話です。

まず最初に新しい事例を紹介します。これは、漫画です。NICでは小学校、中学校、それ以外の社会教育の現場へ留学生中心の派遣プログラムを実施しています。年間約300件近くの派遣をしていますが、その1つのツールとしてこの漫画が生まれました。

これは何かを食べているところです。ちょっと浅黒い人、それからインド人、これは中国か日本人かというのはちょっとわかりませんが、こういったメンバーがいます。その人たちがそれぞれ、鍋のようなものを食べている。カレーのようなもの、ラーメン、タイのトムヤムクン、これらを食べています。

この4人はそれぞれ何を食べているかと子どもたちに絵当てをしてもらいます。例えばインド人がラーメンを食べていたりします。これはタイの漫画家が描いたものですが、要はこういったステレオタイプで見るのではなく、タイ国内でも多文化の共生が息づいていることを伝えるため作られた教材なのです。(p.77、図1-1、1-2、1-3)

これは「マンガジア」というタイトルで、国際交流基金が1995年から日本で十数年開催してきたアジア漫画展で展示されたものの1つがオリジナルで、アジ



丹下厚史

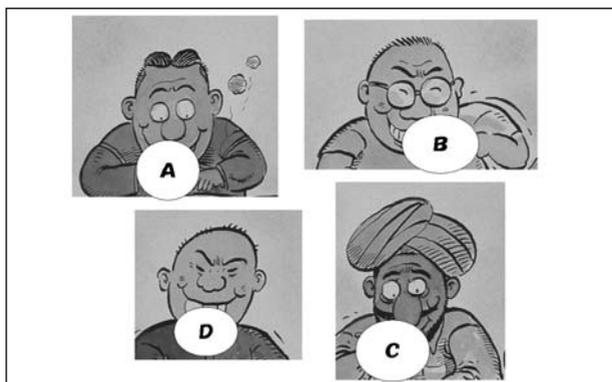


図 1 - 1

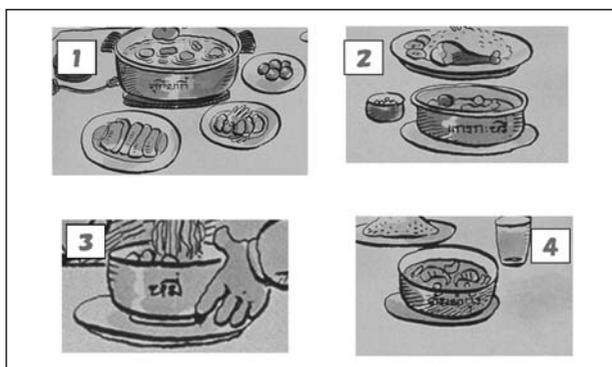


図 1 - 2



図 1 - 3

アのいろいろな面白い漫画を展示終了後も2次利用ができないかと考え作り出したものです。子どもたちの関心を最初にぐっとつかむために、やはり漫画の効果は非常に大きいものがあります。

この教材づくりには07年の事例で紹介した名古屋地域で活動している「国際理解教育セミナー」を中心に、県の協会、市の協会、JICA中部、NGOなどから協力を得ました。素材は国際交流基金から提供してもらい、1年間毎月、東京から基金の担当者が来て一緒に作りました。100枚ぐらいあり、いろいろ考えさせられる漫画です。国際交流基金とNICで配布していますので、ご興味のある方はお問い合わせください。これも1つの協働の中の成果物として出てきたものです。

実は、私は08年4月から、名古屋にある国際留学生会館に異動しました。もともと、愛知県と名古屋市がお金を出し合って財団法人国際留学生会館としてつくっていた施設の業務ですが、財団の統廃合、財団の解散などを経て、現在NICに業務移管されています。

以前はNICの国際理解教育を担当し、加藤さんから話があった災害語学ボランティアの構築に携わってきました。そのときは外国人を助けるだけの1つのスキームとしてできた災害語学ボランティアが、あのような形で社協も含めた防災の各グループの中に溶け込んでいっている。それぞれ個別で立ち上がっていたものが今は進化をしつつあると感じています。

多文化共生の中でも特に留学生という点で考えてみます。今は全国で12万人ぐらい留学生がいて、昨今は約1万人が日本で就職をしたという新聞記事もありました。もちろん中国、韓国、台湾の方が多いです。

福田前首相(08年当時)は、「留学生30万人計画」を掲げていました。その人数でいくと、2015年に留学生が30万人になったときには、その1割としても3万人もの留学生が、それぞれ地域で在住者となっていくような世界になります。

愛知、特に名古屋には集住地区という外国人が多く住む地域もあり、多文化共生というとは多くは就労者など、働いている人たちに目が向きがちです。留学生というのは3～4年勉強していずれは帰るとというのが、一般的なイメージだと思います。しかし、そうでもないということが状況としてあります。

留学生は学業を修めて故国に帰ることが1番の目的です。ただ、そのほとんどは、学業の合間にアルバイトに従事しています。留学生会館に入っている学生も日中は勉強して、午後からは居酒屋かコンビニでアルバイトをして、土日はもう1つもう少し実入りのいいアルバイトとして工場に勤めていたりする。そして卒

業後の就職先については非常に関心が高い。これは少し強調した言い方ですが、留学生の日常の一端でしょう。

一方、地域社会が留学生に求めているものは、言葉は少し大仰ですが異文化の伝道師とか、交流のパートナーということです。実社会ですと、働き手として留学生を見ている。例えば行政だと、留学生会館や奨学金制度などは各地方自治体が運営している。税金を彼らに使うことに対して説明責任をどう果たしていくのか、だんだんと説明が苦しくなっているのが実情だと思います。私はここにかかわって20年、直接の担当として留学生とつきあう場において、このようなギャップや乖離、これまでの中で培ってきたものをどう活かせるかが今の私の宿題になっています。

留学生会館にいるインド人学生が、就職活動でトヨタの最終試験まで通りました。彼の売りはNICの地球市民教室の講師に登録し、小学校や中学校で文化交流をしていて社会貢献を学生のときからやっていることです。日本の学生が就職するときは社会貢献をすごくアピールしますが、外国人の留学生も同じように自分の就職に活動を利点として活かしつつあるというのがおもしろいと思いました。地域社会が求めているものを留学生が果たすことは、自身の将来にも役立っていくと本人が感じ、社会もそういったものを認めていくようになればアルバイトに行くよりそのような交流の方に目が向いていくのではないかと感じています。

次に、コーディネーター専門性の形成要素。これは自己への省察ですが、私の場合は振り返りというふうに捉えていただければと思います。

先の加藤さん、それから勝部さんも、やはりいろいろな「価値・思い・態度」について述べていらっしゃる。多文化社会に関する自らの価値観や思い、多文化共生に向けての社会変革の必要性などを問い続ける態度は必要だと思います。これを自分が変えたい、そのために自分が何ができるか、そのときの立場でできること、あともう1つ付け加えれば、そのときの立場だからこそできることというのは、おそらく形成要素に入ってくると思います。

実は私は20数年前にNICに入ったとき、情報コーナーというところのアルバイトの身分でした。できればまたお金をためて学校に戻りたいと考えていました。

情報コーナーに近所の小学校1年生ぐらいの女の子たちが3人でよく遊びに来ていました。そのうちに1人が急に来なくなり、どうしたのかと2人に聞きました。するとその子どもたちが「もう遊ばない、だってあの子は朝鮮だから」と言いました。

それは僕にとっては、いつでもそこに戻る「原点回帰」となった体験です。そういうことをその子が言っているわけじゃない、親が言っている、地域が言っている、社会が言わせている。そういうものをこの仕事を通じて何とかなくすことができるのであればそうしたいと思いました。

もちろん、いろいろな事業をする中では迷いもあるし、うまくいかないし、ここでこんなことを偉そうに言っていますが、ただ酒を飲んで寝てしまうこともあります。でも、やはりそういった気持ちにいつも戻るということを自分の原点だと思っています。

次にもう1つ、「知識」というところでは「理論の知」「現場の知」「自己の知」というふうに分けて考えてみました。まず、「理論の知」。東京外大のコーディネーター養成講座を受講すると、ショーンのこんな分厚い難解な本（「省察的実践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考」）を、読まなければいけないようですが、理論的に著されたものによってちょっと自分も安心するところがあります。それで自分の立ち位置を確認したり、自分のやっていることが意味あることだと確信できると思います。

あといろいろなところと協働すると、その知識をしっかりと仕入れておくということは共通言語をしっかりと仕入れるということになるので、やはり押さえておかなければいけないだろうと思います。また世界、国の動向、行政、立法、司法の動きというのは、やはりアンテナをしっかりと立てて知識を入れておきたい。知っていれば伝えられたのに、知っていればできたのに、ということはたくさんあると思います。ですので、そこは要素としてきちんと押さえるべきだろうと思います。

次に、「現場の知」というのは例えば地域の状況とか地域の歴史的な背景、そのプログラムが持っている背景、自分と相手の組織の状況、それから関係者の状況などです。体力、財力、気力、硬度。硬度というのを使っているんですが、「あの人はいちばん柔らかい」とかそういう意味です。こういったものをしっかりとさせて、「自己の知」、自分の能力、自分の立場、自分の長所、自分にないものをしっかりと見ておく。そういうものがいろいろなプログラムの中に入っていくのだろうと思います。

また「技術」としては、情報へのアンテナ、取捨選択をする力、自己の配役です。そのプロジェクトの中で、自分は監督なのか、コーチなのか、選手なのか、応援団なのか、メディアなのか。その立ち位置をしっかりとさせて、役割を担う。あとは人間関係構築力と、いとわかない、へこたれない、時にはあきらめも肝心と

いうところも言っておきます。

専門性の形成要素の中では、「人と出会い、関係をつくる」というところは、やはりすべての基本になっていくと思います。

山西 いろいろなものを出していただいた中で、特に「知識」「技能」「価値・思い・態度」は、こういう仕事にかかわりながらコーディネーターとして生きていく1つの原点ということでした。そこに知識や技能というようなところ、さらには私たちが役割としてとらえている、「人と出会い、関係をつくる」というところ、それらを中心にお話しいただきました。

では、続いて小山さんをお願いいたします。

■社会をデザインする—外国人児童生徒教育を事例に



小山紳一郎

小山紳一郎 こんにちは、小山です。

私は大きく2つの話をします。まず、多文化教育にかかわる事業を、この数年間どんな形で展開してきたのかお話しします。次に、それに絡めながら、「リソースを発見し、つなぐ」というところと「社会をデザインする」という部分、私はソーシャルデザインとっていますが、その事例を通じてお話をしていきたいと思います。

多文化教育にはいろいろな定義があり、厳密にいうとちょっと違いますが「外国人児童生徒教育」と読み替えて聞いていただければと思います。

この事業を始めたきっかけは、2000年に多文化子ども支援をテーマとしたシンポジウムを外国人児童生徒の支援活動をしているNGOと共催したことでした。実は何年か一緒にこの事業をやってきた中で、NGOがいくらがんばっても課題解決にはほど遠いという現状が見えてきました。かながわ国際交流財団（以下、財団）として何をやらなくてはいけないかと考えたときに、学校教育行政とNGOをつないで2つのセクターが連携協力する体制づくり、これをめざす必要性を感じたのです。

私どもの財団は、民際協力基金をはじめとする各種事業を通じて、いろいろなNGOとは顔の見える関係にあります。弱かったのは教育行政とのパイプでした。

まず教育行政からの信頼を得るために、学校や教育委員会を巻き込むプロジェクトを構想してみました。

初めて外国につながる子どもが自分のクラスに入ってくるようになったときの教員の戸惑いや悩み、不安は、想像を絶するものがあると思います。そういった教員の方々の悩みや不安を解消するための1つの手掛かり、一助として、教材情報を神奈川県全体で共有する仕組み創出の検討委員会を、01年に立ち上げました。

いろいろ議論だけをしていても仕方ないので、まず何か作りましょう、という話になってできたのが、教材のお勧めウェブサイトでした。当時『みんなの日本語』のような本はたくさん出ていて、そのタイトルと出版社と出版年だけを羅列したような情報はかなり出ていました。この情報を見ていただくと、真ん中辺のところ実際にこの教材を作った教員の方々の感想があります。また、お勧めのコメントとどこに行けばこの教材が閲覧できるのかが載っています。これらの情報を盛り込む形で、初めて国際教室や外国につながる子どもを受け入れる先生たちに役に立つウェブになったと思います。

(<http://www.k-i-a.or.jp/kokusai/k-edu/kyouzai/materials/m0202.html>)

外国人児童生徒をめぐる問題は学校だけでは解けないので、02年に学校と地域NPOの連携の仕組みづくりを目的とした検討委員会を立ち上げました。先ほどお話をした01年の検討委員会も、この02年も、神奈川県、横浜市、川崎市の各教育委員会の指導主事と学校の先生、それから学識経験者、NGOの方々がメンバーとなっています。

検討委員会を立ち上げた02年には、横浜市・大和市、それから大阪の豊中市からも人を呼び、県内外の先進事例を神奈川の学校の教員やNGOの方に知っていただくためのフォーラムをやりました。そして、02年から神奈川県下の学校と地域NPOの連携事例を報告書にまとめて、03年に関係機関に配布しました。その後はしばらく教育のことから離れて、多言語の情報の流通についての調査研究を数年間やって、また帰ってきたのが06年です。

地方自治法が改正され、財団の運営している「あーすぷらざ」という学習文化施設が06年からの指定管理者制度により、競争で5年間だけ運営ができるという仕組みに入りました。財団は業者として05年の春にプロポーザルを書きました。その中で、ここ数年温めていた外国人児童生徒教育と日本語学習に関するリソースセンターの立ち上げと、「あーすぷらざ」の中の資源を利用する外国人の教育相談事業の立ち上げという2つをプロポーザルで申請をしたところ、幸い指

定管理者になりました。5年間の期限で「あーすぷらざ」は私どもが運営しています。

その中につくったのが、「子ども支援コーナー」です。ここに日本語の関係資料や外国人児童生徒の保護者向けの多言語の通知文などをたくさん収集しています。これらの資料を基にしなが、同じく06年に立ち上げたのが外国人教育相談事業です。現在も中国語、スペイン語、タガログ語、日本語の4言語で相談活動をしています。

07年の4月に行政改革の絡みで、ほかの財団と私ども神奈川県国際交流協会を統合しました。統合は大変だったのですけれども、事業再編のきっかけになると考え「多文化子ども支援ネットワーク会議」というのを埋め込みました(図2)。

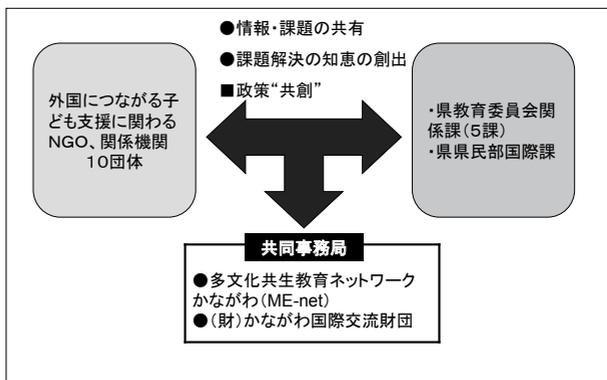


図2 多文化子ども支援ネットワーク会議

この会議では、私どもの財団とME-netというNGOが共同事務局となり、外国につながる子ども支援にかかわるNGOなど関係機関10団体、それから神奈川県教育委員会の関係課5課と、神奈川県県民部国際課が構成メンバーとなっています。同じテーブルに着いてもらって、情報、課題の共有と、課題解決の知恵の創出、そして、まだこれは実はできていないのですが、政策共創というところまで持っていく。そういった両セクターが連携をしたプラットフォームをつくらうとしているところです。

今年度は、02年の「お勧め教材ウェブ」が進化して、ブログを準備し始めています。続いて「ソーシャルデザイン」ですか、リソースを見つけてデザインしていくというところの話に入っていきたいと思います。

「ソーシャルデザイン」という言葉の意味ですけれども、こういうふうに理解していただければと思います。「潜在的な課題、ニーズを可視化し、あるべき社会の姿をデザインする」。課題解決に向けてリソースを見つけ、新しい仕組み、制度、事業を創出していく、と読んでいただければと思います。

次は、多文化教育にかかわる事業などを通じて、私がかどのように専門知識やス

キル、人的ネットワークを広げてきたのか話してみたいと思います。

最初に結論を言います。秘技はない。1つは、幅広い人的ネットワークを持つということ。国際交流協会だから、必ずしも国際交流のことだけというのではなくて、福祉とか環境とかまちづくりとか、いろいろなことに首を突っ込んでいると、いろいろな知り合いができるのではないかと思います。

それから、課題解決に必要なアイデアの引き出しを増やすことというのも重要ではないかと思います。先ほど勝部さんがおっしゃっていましたが、最新の情報は現場にあります。特に都道府県で仕事をしている方にお勧めなのは、まず自ら市民活動をしてみることです。市民活動をしていると行政や国際交流協会ではない、市民の目線で物事が見られるようになってくるはずですよ。

2つ目は、まず施策について情報を仕入れることで行政を敵対視するのではなく、例えば県の国際交流協会であれば県庁の中にお友達をつくりませんかという提案です。仕事のかかわりの中で、この人はハートがあるとか面白いなと思ったら、その人と息の長いつきあいをしていくとある日宝物のような情報を教えてくれることがあります。あるとは限らないですが、可能性がります。そういう意味で、お友達をつくりましょうというのが2つ目です。

多分野への関心は課題解決に向けたリソースへと導いてくれるということですよ。これは先ほどの市民活動ともかかわりますが、私自身の体験を踏まえています。現在、私がかかわっているのは財団業務ですがそれ以外のところ、例えば、学会とか研究会に入ったり自ら市民活動をやったりすることで、それが養分となって本来業務にも栄養を与えていく。そういう循環があるのではないかと思います。できれば、市民活動を特に都道府県とか国の省庁の職員がやっていくと市民目線になれるのではないかと思います。

最後に、新しい仕組み、制度、事業開発に必要なことを2つ言います。1つ、まず「好奇心を持つこと」。これはぜひお願いします。私は中間管理職になりましたが、課長さん自身が心底面白がらないとその空気は部下に伝わらないと思います。そういう意味では、何か面白がるというのが大事。

それから2つ目は「妄想すること」。これが非常に大事です。どういうことかということ、例えば勝部さんの報告にもありましたが、この人とこの人が会うと何か面白い反応が生まれるのではないだろうか、そういう仮想実験を頭の中でしてみる。それから、異質な分野のリソースをくっつけてみるとどんな新しい仕組みが生まれるのか、そういう仮想実験を頭の中で試みるということが結構重要だと思います。

最後に、地域課題を解決するための使いそうな施策に関して、先ほどの多文化子ども支援分野での例を挙げます。今年の4月から文科省のモデル事業で、スクールソーシャルワーカー派遣事業というのができました。この新しい制度に外国人の若者がなれないだろうか、と考えてみる。そういう施策をこのように応用したらこんな展開ができるんだろうと、そういうイメージする癖をつけることも重要だと思います。

僕が訴えたいことは2つです。専門性養成にとって何が大事か、「好奇心」と「妄想力」。以上です。

山西 小山さんとは、出会ってから何年も経っていますが、本当に幅広くいろいろなことをやっていると思います。その中で、リソースを発見することと社会をデザインするということを語っていただきました。丹下さんの名古屋市という立場からでのお話から、小山さんの県の立場に入って、どういうものを事業として作り出しているかをうかがうと、市町村レベルと県レベルの大きな違いもありますし、そういった中で見えてくるある種の専門性といったものの違いもあらためて浮かび上がってきたかと思います。

それでは3人目の杉澤さん、お願いします。

■省察（振り返り）—外国人相談事業を事例に

杉澤経子 東京外国語大学の多言語・多文化教育研究センターで働いています、杉澤と申します。

専門性形成の視点として挙げられた「省察」についてが私に与えられたテーマなのですが、どういうふうにそれを話したらいいのかが難しいです。実践の事例としては外国人相談事業を取り上げて、事業がどういうプロセスで作られ、継続されてきたのかということを語ることによって、自身の実践の「省察」を試みてみたいと思います。また「省察」の手法としてどんなことが考えられるのか、相談事業の中で行われたことを、一つの事例として紹介したいと思います。

私自身は1989年に武蔵野市国際交流協会（以下、MIA）が設立された時に職員になり、主に外国人施策をずっと担当してきました。武蔵野では行政本体はどちらかというと都市交流をメインにしていたので、MIAが外国人住民に対する事業を担ってきました。ですので、当初から視野としては、外国人住民のた

めの施策、事業づくりというところで行ってきたわけです。

外国人相談の事業は90年当初から行われていましたが、最初は、市民ボランティアが、MIAの一角を貸してほしいということから始まっていきます。私は市民の方たちが毎週受けている相談の内容を共有させてもらうことによって、実は地域に暮らす外国人の方たちは、いろいろな問題を抱えているということを知り、その中から、これは個人の問題ではなく社会の問題じゃないかということが多々あることに気づかされるようになってきたわけです。

一方では、90年から外国人のための日本語教室も開いていました。地域で暮らすために日本語を勉強したいという外国人が集まってきましたが、こちらはそれほど深刻な相談ではないものの相談が寄せられました。武蔵野では週1回行われている教室に参加してきている人が一方で週1回、市民の方とマンツーマンで日本語で交流をするという活動を行っていました。

全員が集まってくる教室では個人的な悩みなどは話されないのに、マンツーマン活動では何回か会って親しくなってくると、いろいろ出てくるわけです。ボランティアの方は、自分では受け止めきれないので相談に来る。そうした相談を受ける中から、いろいろな問題が起こっていることを知るようになってきて、私は、ボランティアの方々と雑談の中から地域に暮らす外国人のための相談事業づくりのヒントを得ていくようになっていったわけです。

市民の活動をサポートしていくということは、仕事でもあります。けれども、外国人住民が日本で安心して暮らせる地域をつくっていくためには、何が問題なのかを知ることが、勝部さんの言う仕組みや制度づくりにつながっていくわけです。MIAの公的な事業として何が必要とされているのかということ、考えさせられ続けてきたというのが、最初の時期だったと思います。

例えば、90年代前半は、日本語が本当に上手な留学生がアパートの入居拒否をされたというような相談が毎週のように来るわけです。これは問題だ、どうしたらこうした差別的な問題を解決できるかということから、事業が展開されていくわけです。

90年代後半になると国際結婚が増えてきて、一方で離婚の相談がたくさん寄せられるようになってきました。どう対応したらいいのか、地域で外国人支援をやっている弁護士に聞きました。法律的に何が問題かというのを教えてもらう中で、これはボランティアだけで相談を受け続ける状況ではないということ



杉澤経子

を感じ始めました。

97年に、弁護士と組んで外国人相談を行っていた市民団体と連携をして、初めて外国人総合相談会を、市民の企画・提案事業として実施をしたということが、専門家が対応する相談事業の始まりです。

この時は、ほとんど市民団体におんぶに抱っこで、MIAとしてできたことは多少の予算と広報、場所を提供することぐらいしかなかったのを覚えています。何となく言われるままにやりながらも、通訳はやはり言語数が多い方がいいということで、MIAで活動していたボランティアの方たちに声をかけ通訳として参加してもらい、一緒に相談を受けたということがあります。

さっき丹下さんが「原点回帰」という話をされましたが、私はこの初めてのボランティア団体と一緒にやった相談会の現場の出来事が、一生忘れられないと思います。

弁護士と労働相談員、通訳が20人ぐらい待機していました。しかし、広報もどこにしていかが分からない、予約なしのやり方だったので、実は相談者がほとんど来なかったのです。外国人登録者の人口比からいうと、おそらく中国語の通訳が1番必要だろうと、中国語の通訳の方が4、5人いたのですが、中国語の通訳の出番は1回もありませんでした。

最後、終わった後に振り返りのミーティング（フィードバックミーティングと呼んでいる）をやりました。当然のごとく、中国語の通訳として来ていたある女性から手が挙がって、「こんな5時間もただ座っているだけの活動は本当に非効率的だ、運営の仕方をもっと検討すべきだ」と言われました。こちらは主催者側ですから、「本当に申し訳ありませんでした、次回からは何とかいい形で、皆さんにご迷惑を掛けないように運営していきたいと思います」というふうに答えました。

そうしたら、元留学生で、同じく通訳ボランティアとして参加した中国人男性が「僕にちょっと一言言わせてください」と手を挙げてくれました。

「僕は4年間留学生としてずっとアルバイトをして、苦学をする中で、困ったときにどこに行けば相談できるのだろうかという思いを抱えて日本で暮らしてきた。日本語ができる自分でさえどこに相談をすればいいのかわからなかったのだから、言葉ができない中国の人たちがどれだけ困っていることか。本当にこういう場を欲しいと思っています。だからどうか、やめるなんて言わないで、続けてください」と言われました。

私はその一言に本当に救われた思いがしました。しかし、多言語化すればする

ほどボランティアの方たちも増えていきますので、何もしないまま待機することは往々にして起こることになります。

専門家対応の相談事業はこうした問題を抱えながらも継続してやっていこうということになり、その後イベント式ではない継続的な相談事業を展開していくにはどうしたらいいかということで検討会が始まりました。そこに集まったメンバーは30人ぐらいでしたが、弁護士、労働相談員各1人、あとは全部通訳ボランティアの人たちです。もし事業としてやるとしたら、協会としては場所の提供と広報、予算は20万円ぐらいしかありませんが、このメンバーで何ができるか一緒に考えませんか、ということで始めました。

月に1回、2年間検討したのですが、このプロセスは本当に面白かったです。弁護士と通訳ボランティアの間にすごいやりとりがあったりします。このやりとりの中で、お互いの立場等を理解し合うことができ、事業が作り上げられていくというプロセスを体験しました。その結果、月1回の「専門家相談」という事業が始まりました。

そうするといろいろな問題が見えてくる。法律相談に来た人の問題が実は精神的な問題であったり、相談内容は複雑化していること。多言語対応が必要だということ。それから地域の外国人だけではなくて、むしろ半分以上が遠方から来ること。中には、九州から飛行機でやってきたという相談者もいました。「九州でもこういう相談を受けられるところはある」というと、「そんな近くで相談をしたら、私はその地域で暮らせなくなる」と言われました。

そういう状況の中では、行政の枠組みも取っ払わなければ、多文化社会に対応できる仕組みなどあり得ないというのが私の実感でした。そこで都内にこの活動を広げていこうということで、都内の自治体、国際交流協会、NPOなどとネットワーク組織を作り「都内リレー専門家相談会」にチャレンジをしたわけです。ネットワーク組織のコーディネーションに取り組んだということです。

ネットワーク組織の難しさは、行政の場合など毎年担当者が変わったりして状況がその都度変わるといことです。それに対して、どう多様な組織のニーズや特性を織り込みながら、協働の事業としてアウトプットしていくかというところのせめぎ合いの中で、意見交換、課題の共有、思いの共有という場の設定が、実はネットワーク組織の場合には最も重要だということを実感してきました。

最後に、振り返ってみると、こうした外国人相談事業の展開をする中で、前半10年ぐらいは、行政組織との調整というのが一番大きい仕事だったような気がします。とにかく上司とはよく議論をしました。

そういう中で事業展開をするのですが、実をいうと、本当にこれでいいのか、いつも不安で、多くの人たちがかわってくれればくれるほど、本当にこれでいいのか、こんなにたくさんの人たちが時間を使ってかわってくれているのに、これが間違っていたらどうしようという、仕組みをつくっていく立場としては、そこが本当に不安でした。ただ、7年か8年ぐらいたったときに、外部の人が評価をしてくれたことがありました。ある意味専門家が評価をしてくれたということは、1つの自信になったというのは間違いないと思います。

ただ、だからといって、その後も自分のやるべきことが正しいなんて思ったことは1回もありません。だから事業を企画してそれをやっている最中も、この事業は途中で変わってもいいのだと、いつも思いながらやってきました。それはなぜかという、現場の問題に対してその対応策を考えているわけですから、現場の問題が変わっていけば、当然その事業自体も変わっていいはずだと思います。

以上、私自身の経験からコーディネーターという立場で仕事をしていく上でのポイントを挙げるなら、1つは、自分には知らないことがたくさんあるという認識を持っていたことです。だからこそ弁護士に聞きに行ったり、精神科医に聞きに行ったりと多様な方々とのネットワークが必要になるのだと思います。

それから2つ目は、こんな弱音は吐きたくないのですが、実はいつも不安を感じていたということです。でも、そんな私の話を聞いてくれて、励ましてくれる人たちが周りにいたということが、私がここまで仕事をしてこられたとても大きい力だったと思います。

3つ目が、事業を行うことが私の仕事ですが、今振り返ると事業を成功させようというのではなくて、問題は何なのかということについていつも問い直していたと思います。だから「事業を変えよう」とすぐ言えるのは、たぶんそういうことだと思います。

最後に4つ目は、何のためにやっているのかを、やっぱり常に問い直し一緒に活動している人たちと共有したい。だからこそ、専門家相談会の第1回目に行った振り返りのためのフィードバックミーティングを今もずっとやっています。どんな偉い弁護士先生にも、最後の振り返り、フィードバックミーティングには必ず出てくださいとお願いしています。課題を共有し何のために活動をしているのかを常に問い直していく作業の場として、このフィードバックミーティングの重要性があるかと思っています。

フィードバックミーティングの意義を言えば、3つあると思います。1つは、冒頭に紹介した通訳ボランティアとして参加していた元中国人留学生の思いのよ

うに、一人ひとりが思いを持って活動に参加していますので、思いを伝え共有する場という意義があると思います。

2つ目が、さまざまな専門家、通訳は言語の専門家ですし、弁護士は法律の専門家です。そういう、各分野の専門家たちが同じ課題を違う側面から、検証することができるということ。

3つ目が、さまざまな専門家の目を通して相談の内容を検証することにより、広い視野から日本社会の課題を共有化できるということなのです。

「振り返り」つまり「省察」をどう事業の中に組み込めるか、1つの方法論として、フィードバックミーティングがあったと思います。

山西 専門性を押さえつつ、その形成の視点を語るというのは、それだけを語ってもなかなか意味を持ってこない。今、事例を中心としたお話の中で、いくつかのキーワードをそれぞれの方に出していただいたと思います。

さて、私からもそれぞれの方へ聞きたい部分もあるし、当然会場の皆さんも聞いてみたいところがあると思います。いかがでしょうか。

質問者 地域のボランティア日本語教室の代表をしています。コーディネーターの姿勢に関してお聞きしたいと思います。

コーディネーターが頑張れば頑張ってしまうほど、組織の中で浮いてしまうような現象は、たぶん皆さんも経験していると思います。私は、非常に小さな組織で、外国人の方と1対1で日本語学習をやっています。本当に点と点の関係で、2時間ほとんどそれでやっていますので、下手をすると教室の中のほかの人の顔と名前が一致しないという場合さえあります。そのために、ほかの教室と同じようにティーパーティーをやったり、外部の研修も出たり、地域の民生委員さんの話を聞いてみようよとか、学校ではどうなっているのかいろいろ意見を聞きましようよと、そういういろいろなプログラムを考えて提案しています。

ボランティアでやっているのだから、2時間の中でそこまではなかなかできないという意見がだぶ出ています。実行委員会は非常に盛り上がるのですが、盛り上がるほど、ほかの一般のボランティアの人たちとの乖離が出てきて、この間運営委員会で、頑張れば頑張るほど、どんどん離れているのではないかとと言われて、冷や水を浴びせられた思いをしました。

こういうことはおそらくパネリストの皆さんは経験されてきたことと思います。その中でコーディネーターはどういう態度でのぞんだらよいのか、ご意見を

伺いたいと思います。

山西 もう1つ、質問をお受けしましょう。

質問者 国際交流協会の職員です。杉澤さんのお話を伺って、お尋ねしたいと思った点があります。先ほどの方と同じく、実践の中でどのようにコーディネーターとして専門性を形成してきたかということに関してです。

例えば相談会があって、フィードバックミーティングがあって、そこからいろいろな事業づくりのヒントがあって、というお話がありました。そういったプロセスの中で、コーディネーターとして心がけてこられたことをお話しいただきたいと思います。

山西 今お二人の方から質問がありました。1つは、地域の中で頑張れば頑張るほど浮いてしまうが、それをどういうふうクリアしてきたかということ、もう1つはまさしく省察のプロセス、これをどういう形で自分として、コーディネーターとしてかかわってきたかという質問です。

まず、丹下さんに、人と交流し関係をつくる、ということも含めてコメントしていただけたらと思います。小山さんには、どのように好奇心や妄想が生まれたのか時間的なプロセスについてのコメントをお願いします。杉澤さんは、省察ということ最後に言われています。私たちの議論の中でも出てきていますが、省察というのは、まさしくフィードバックミーティングで、全体で相互に省察する関係をどうつくっていくかという部分です。時には、非常に客観的な第三者という部分、あと自分個人としての省察、省察のいろいろなプロセスがあります。今後、私たちがそういった専門性を形成するという視点に、あらためて立つならば、どういうふうに組み入れていくかというところを、さらにコメントいただけるでしょうか。

丹下 やればやるほど浮いてしまうのではないかというご質問ですが、やはりグループの到達点というか、その2時間のグループの中で一番大事なところは、学習者が日本語をしゃべれるようになるかどうかということでしょう。それについてはコンセンサスがあって、実行委員会の方と、ボランティアの方々の中で、共有の部分もあると思うんです。

もちろん確かに私も熱くなって、やろうよとか言うと、飲み屋ではもう何でも

できると思うんです。だけど冷静になって考えてみると、いや、そんなことをいったって、日曜日に活動をすると、それには、水曜日にまた集まらなきゃいけない。そうなると、水曜日に集まれる人だけ集まろうということになり、その人たちだけの考えだけですすんでしまうことになるので、運営する側、その中心のグループと、活動にかかわっている人たちがどう共有できるか考えなくては…そんなことになるわけです。

外へ研修に行くといったことも重要だとは思いますが、まずは、グループの中での共有意識、原点に戻って、このグループはいったい何が着地点なんだろうと確認すること。そのためにスキルがあるのであれば、研修を受けに行こうということも、説得力をもって伝わっていくのではないかと感じました。

「人と出会い、関係をつくる」ということについては、いろいろなやり方があります。例えば、私はすごく上手に名古屋弁をしゃべることができます。今は共通語でしゃべるようなふりをしています。今、留学生会館は、地域の町内会に何とか溶け込もうとしています。「おみやあさん、どうしとりゃあすか」と言って、名古屋弁を通して、なかへ溶け込んでいきます。やはり相手によってそのアプローチの仕方を考えていくというのは、とても大事なことです。

その場合、コーディネーターも自己の配役を考えなければいけないと思います。コーディネーターというか、時に事業から見たらプロデューサーです。監督の立場でいくのか、コーチでいくのか、選手でいくのか、それとも応援団でいくのか、記者でいくのか、いろいろな立場があると思います。どの立場に立つのか、自己分析をした上で、この事業とかこの目的をやるには何がいいのだろうかということ踏まえて人と交流する。人間関係を構築していくのは、やはりなかに入っていかなければだめですね。好奇心と妄想を持って、語ることです。

先ほど小山さんが、いろいろな社会活動をされているのが全部養分になっていくとおっしゃったけれども、確かにそうです。僕は小山さんほど高尚な社会活動をしているわけではないですが、飲みに行ったり、ナゴヤドームへ行ったり、そういうような関係の中から、他の仕事にかかわっていくものも出てくると思います。アクティブな人は、もちろんコーディネーターという職だけではなくて、いろいろな活動、いろいろなところに出ています。自分の専門のところだけではなくて、それ以外のところにもネットワークを持つことが、自分の人間的な幅を広げる、これが魅力になる。それがまた次へのきっかけになる、と常々思っています。

それから、いろいろな年代の人と話をすること。例えば、加藤さんのお話にあっ

た災害のボランティアの人たち、ボランティアコーディネーターの人たちは、シルバー世代の方が多いです。すごく生き生きしていて、たくさんの知識もあって、スキルも持っています。そういう人たちと話をしている中で、やはり、地震のときだけではなくて、その力を平常時にも活かせる形に持っていける。相手の得意なところを知って、それを自分のフィールドに少しずつ絡め取っていくようなことも、コーディネーターとして必要なのかもしれません。

小山 先ほど丹下さんから、何か高尚な活動という話がありましたけれども、実はここ数年好きなのが温泉巡りです。ある大学の先生と盛り上がりまして、最近、温泉談義のメールを交換したりしています。そんなことも意外とどこかで養分になっているのかと思います。

先ほど、コーディネーターが頑張り過ぎると浮いてしまうという話があったのですが、頑張らないというのもいいのかなど。どういうことかということ、福祉の世界では有名ですが、だいぶ前に金子郁容さんがボランティア論の中で、自分の弱さが他者との関係性を構築していく力になると言っています。弱いからこそ人とつながれる、ネットワークを呼び込んでいくということなのです。

私は今、五十肩で肩が上がりません。でも肩が上がらないと、荷物を持ちましようか、と言われて他者とつながっていく。そういう意味では、まずは頑張らないで、人の力を借りてみようというのが1つです。

それからもう1つ、好奇心と妄想力というのはわかったけれども、どうやってそれを培ってきたのか、という質問がありました。全然培っていないのですけれども、何でこういう方にはまってしまったのかというのを振り返ってみると、おそらく自分がある異なる要素を結びつけて、こうなるだろうというのを実際に1個でも実現させてみると、それが非常に面白い体験として、自分の頭の中に定着します。また、次はAとBとCをくっつけてみたらZが出るでしょう、というような、そういうことがだんだん面白くなってきます。最初からそんなにあらゆるジャンルに好奇心があったわけでないけれども、妄想力はもしかしたら結構あったかもしれません。いわゆる資質論に引き付けずに職能論的に言うと、いろいろな仕事をやる中で、おそらく20代、30代前半ぐらいで自分の夢が形になるという経験をしたということが大事で、それがステップになって楽しくなってきたのだと思います。

好奇心を無理やり持つというのは難しいことですし、妄想というのも自然発生するから妄想なのであって、コーディネーターの専門性を高めるために妄想力を

鍛えるというのは、ちょっと無理だろうという気もします。20代ぐらいのときに、先輩と何か対話をしながら、1つ自分の小さな夢を形にしてみるという体験は重要で、それが基点となって、何か面白がって仕事をやる身体になっていくのではないか、そんなふうに思いました。

杉澤 浮いてしまうというのは、活動をつくっていくときに、こういう活動をやるべきだというふうに先に考えを持っていることが多いので、むしろ問題意識を共有する人たちで何ができるかから考えてみたらどうでしょう。先ほど紹介した外国人相談事業はまさにそうしたプロセスで行われてきました。やりたい、やれるという人で集まって、このメンバーで何ができる、どういうふうにする、というところから始めました。途中で人がいなくなったら、もう1度いるメンバーで再検討して、活動を修正する。また日本語教室でいえば、ニーズが変われば、そのニーズに対応できる形で、今いる人たちでできることから始める、そういう発想でやる。

頑張っている人というのは、人にも自分と同じ頑張りを求める傾向がありませんか。「必要性はわかっているのでしょう、やってよ」となると、ボランティア活動の場合途端に引いてしまうことがあるのだと思います。

基本的には、そこにいる人たちと語り合う中でしか、活動は作れないのではないかと考えています。思いを語り合うこと、それに尽きます。

ですから協働ということも、どこどこをつないで協働の事業をつくろう、なんていうふうに先に考えた途端に、協働ではなくなるので、この人たちと協働できたらいいなと思ったら、その人たちと語り合う。その中でやろうかとなったら、じゃあ今度ミーティングをやりましょう、といって活動が始まる。そういうことなのではないかと思っています。

コーディネーションという視点でいえば、一人ひとりが何を得意にしている、何をやりたいと思っているのか、どのぐらい時間があるのかなど、そのあたりを頭に入れておくと活動のイメージがしやすくなると思います。

もう一方では事業を成功させていくということも、実は重要なことです。行政的にいえば、税金を使ってやるわけですから、成果はやっぱり出さなければいけない。そういう意味でいうと、これは自分の経験から思うことですが、5人の核となる人は絶対に必要だということです。思いを共有できる、一緒に頑張れる仲間です。その5人が確保できれば1年ぐらいは持つ。立場を超えて一緒にやろうよという仲間が作れるかが鍵だと思います。

専門性形成において「省察」をどう組み入れていくかについては、本センターで行っている「多文化社会コーディネーター養成講座」で4つの手法として実際に導入しています（詳細は p.23 参照）。

山西 先ほどの第1部のコメンテーターをしていただいたお二人から質問をいただきます。

加藤 小山さんに質問させていただきます。先ほど私が紹介した防災の仕組みは、皆さん最初の段階からこういう地域をつくりたいというのがある程度同じ方向を向いていたので、その中に入っていきやすく、今後もおそらくいろいろな細かい問題はありますがぶれないと思います。

神奈川の国際交流財団では、子どもの教育をめぐるいろいろなプロジェクトをずっとやってきた中で、同じテーブルの中に財団とNPO、そして教育委員会、教育行政の方がまずそこに座るということでしたが、私どもではそれは非常に難しいと実感してきました。なかなかできないものですから、地域の方とNPO、NICでいろいろなプロジェクトを周辺の部分でやりながら、それを発信している段階に今なおあります。同じ方向になかなか向いていない。特に対中間支援組織と対行政という中で、どういうふうに中間支援組織やコーディネーターとして動けば、活動につながっていくのかと考えています。要は、交流協会はまだまだきちんと評価されていないのかと感じています。組織としての力、コーディネーションをする組織としての力をもっと蓄えていかなければならないのかなと思いますが、それについてどうお考えでしょうか。

勝部 先ほど市役所の職員さんや官僚の皆さんもぜひ地域活動に参加をという話がありましたが、豊中ではもう実現しています。社会福祉協議会と国際交流センターにも一部協力していただいて、市役所の職員研修でフィールドワークに出てきていただいています。3日ほどの研修ですけれども、現場に出てもらおうということの中から非常に感動して帰る方も出てきています。

また、コーディネーションの話で、やはり福祉分野もコーディネーションの「思い」とか「価値」とか非常に共通すると感じました。多文化でのコーディネーションの特有性あるいは固有性について教えていただきたいと思います。

小山 最初に加藤さんの話ですけれども、偶然が作用したということがあります。

というのは、共同事務局をやっているパートナーのNGOが、神奈川県協働事業、パートナーシップ事業というのがありまして、そこで昨年度から教育委員会とはすでに事業を始めていたのです。そのNGOのプロポーザルの中に、ネットワーク事業をかながわ国際交流財団と共同事務局方式でやっていきたいということがまずありました。

それから、それと軌を一にするように私どもも同じ時期にネットワーク会議事業の予算を上げていましたので、非常にいいタイミングで共同事務局を立ち上げることができた。このように偶然に左右された面がありますので、このプラットフォームの立ち上げを北海道から沖縄までの国際交流協会がすぐにはできるとは全然思いません。非常に難しいと思います。

ただし、先ほど2000年からの流れをずっとご説明してきたように、私どもの財団自体は、神奈川県だけではなく市町村の教育委員会に対しても強力にいろいろな事業を打っていますので、最近ではむしろ教育委員会の方から教えてほしいという電話がかなりくるようになってきました。

それからもう1つは、市町村の教育委員会と共催で、多文化共生教育に関してのセミナーを毎年場所を変えながらやっています。そういう土壌づくりを8年間ぐらいいや、ここまでできているということですので、一朝一夕にできるものではないと思います。あともう1つは、個人の性格として何かぐっと行政に入り込む力が、もしかしたら私にはあるのかもしれないですね。

お友達をたくさんつくっていますので、それなら文科省の裏情報を教えてあげるよ、というような人脈が教育委員会の中で縦横にできているのです。それがないういきなり加藤ですと名刺を持っていても門前払いです。そんなに甘くはないと思います。

杉澤 多文化の個別性についてですが、大きくいえばやはり言葉の問題、文化の違いの問題がまずあり、2つ目に外国人であるという、日本国籍でないことによる制度的なはざまに落ちてしまうという問題があると思います。

それからあとはやはり、見るからに日本人と違うという差異の問題です。福祉の分野でもそういう問題はあるかもしれませんが、先ほどの丹下さんの子どもの事例にもあったようにホスト社会側にある差別あるいは排他意識というのが、とても大きい問題ではないかと思います。すごく乱暴に雑駁に言いましたけれども、そのあたりを頭に入れながら活動を展開していくことは重要だと思います。

山西 会場の皆さんからご意見、ご質問がありましたらどうぞ。

質問者 私は横浜市の国際交流ラウンジでボランティア活動をしています。皆さん思いを持っている方たちが集まってやってられるから、この活動は非常に盛り上がっていると思うのですけれども、私はこの活動の最終目的が何なのかということをお聞きしたいです。

質問者 川崎市で外国人施策にかかわっている外国人です。専門性に関してちょっと一言。社会をデザインするというのですが、特に職業でコーディネーターの仕事をされるときに、社会と自分が別であるという傾向があるのではないかと思います。先ほど小山さんから、市民活動を自らしてみても、という提案がありました。それはちょっと体験するという感じです。実際に自分が社会におけるテーマを持ち、そのテーマに基づいてきちんとかかわっていくということが本来の「社会をデザインする」ことです。その視点を持っていかねばならないけれども、その地点にまだ立てていない社会というのが実情です。経験のある方は個人的な活動にもそうした視点を持てるのですが、どうすればその出発点に立てるか、教育・人材育成の観点から、小山さんにご意見を伺いたいと思います。

質問者 長野県の上田市から来ました。コーディネーションしていく上で、人とのつながりをつくっていくことが大事だということですが、活動を続けていくうちに悪口を言い合うような人間関係ができてしまうことがあります。活動を続けていく上でそれをどうやってクリアしていくのか、また、その壊れてしまった人間関係を戻すためのうまい方法はあるのでしょうか。課題を出し合うという意味で、批判的な意見を言うことの意味もあると思っていますが、悪口ではなくいい形で循環させていくためには、どういうふうコーディネーションしていけばいいのか、おたずねします。

小山 社会のデザインをする当事者として、市民性の獲得に向けて出発点にどのように立てるかという話だと思いますが、結構難しい。おっしゃる通りだと思いますが、難しい問いだと思います。

私は先ほど提案として、別にそれは公務員だけを指しているわけじゃなくて、

企業人であれ何であれ、財団の職員であれ、誰でもというつもりで言いましたけれども、まずは活動でいいと思います。まずやってみる。その中から時間が経過して、だんだん自分の中の市民的感觉というのが呼び覚まされてくる。それで一緒に社会をつくるという気持ちになっていく。

それには、何か理念で引っ張るとするのは難しく、やはり参加してみて、自分がだんだん他者と対話しながら変わっていくというようなプロセスが大事だと思います。ですから、そういう意味では、この方策をやれば突然日本国民全員が市民になります、といったようなものはないと思います。

杉澤 壊れてしまった人間関係をどう修復できるか。それは簡単にはできないと思います。

コーディネーターって完全な人間じゃないです。フォーラムで事例をお話すると何かすごい人だななんて思うかもしれませんが、こういうふうな事例として発表できる裏に、いくつもいくつも失敗して、人間関係を壊して、泣きながらもう私は辞める、なんて何回言ったか分からないという、その繰り返しの途中で今があります。

その中で1つ私が培ってきた“わざ”、といえるものは、3歩歩いたら忘れるということでしょうか。それがなくてやっていけなかった。上から怒られ、下から突き上げられ、ある意味コーディネーターは中間的な位置にいますから、両方からいろいろ言われます。その場合には、自分が悪口を言われる立場をあえて取るということも必要になります。ボランティア活動とか市民活動をうまくやっていってもらうためには、コーディネーターがそれを引き受けることも必要です。

ボランティア活動は嫌な思いをしてまでやりたくないですね。だから壊れてしまった人間関係はそれはそれでしょうがない。だめなものは別れて、だけど同じ地域で、尊敬しなくてもいいから、お互いに、ああ、あの人は元気でやっているな、ぐらいの感じで、穏やかに暮らし続けられる地域をつくっていけるかということが実は重要なのであって、何かあまり理想型を描かない方がいいのではないかと思います。

丹下 私は、人間関係構築力ではあきらめも肝心と言いましたが、自分が独善でないならば、客観的に見てということは大事です。文句を言われるということは、何か気に入らないところがあるわけですから。しかし、客観的に自分を見るということができた上で独善でないのであれば、その相手とはさようなら、別れたら

次の人、というところも絶対必要だと思います。

先ほどのある日本語教室では合わないかもしれないけど、その人は隣の日本語教室だったら合うかもしれない。誰からも好かれるすてきな私というのは、やはり難しいと思います。

山西 先ほどのご質問の中で、この活動の最終的な目的はどこなのかというのがありました。この目的に関しては本当は私たちが丁寧に、もっといろいろな形で議論しなければいけない、お互いの思いをきちんと表明していくということが一番大切だと思います。

最初にお話ししましたように、私たちのこの研究では、目的は3つ置いています。専門性の議論が出てくる中で、その形成の視点に関しては、今日の議論をあらためて見ますと、やはりこの3人はまさしく自分たちが生活しながら、現場に触れながら、その中である種の専門性を徐々に形成してきている。これは1番力強い。それぞれが20年ぐらいの経験の中でのコーディネーターという姿として見えてくる。ここに1つの形成のプロセスがあるということは非常によくわかる。

一方、いろいろなところである種の学習、教育プログラム型のものが生まれてきた。これを私たちはどう考えるのか。私の中には、既成の枠をどう崩せるかという思いが根底にあります。教育という形のある種のプログラムは、生活の中で培ってきたプロセスがどれだけ意識されているのかという視点で見ると、非常に表面的な、形式的な部分にならざるを得ないところがある。

ですから、東京外大の多文化社会コーディネーター養成プログラムですと、教室型の学びと、地域・現場に入っていく学びをどのようにリンクさせながら、両方のいいところを活かしていくプログラムを今後はどう作っていただけるかというところに、1つの思いがあります。

さらには先ほど省察というテーマもありましたが、これも学びの過程に省察プロセスがどれだけ入り込んでいるかということが重要です。省察するということは、学びのねらい、内容、方法といったものをきちんと評価できる状態で本人が学んでいて初めてできるわけです。多くのプログラムは他者から与えられているプログラムで、受け身でかかわっていると省察の主体性はそこにはなかなか出てこない。そういったプロセスを実際にどう織り込んでいけるのかを考えていくと、やはりいろいろな形成の視点が浮かび上がってきていると私は思います。

あらためて今後の研究を考えると、専門性形成の視点だとか、プログラム等々のありようについて、皆さんからご意見があれば遠慮なくいただいて、私たちメ

ンバーはそこをもう1度、従来の枠を崩しながらも創造的なものをどれだけ出せるのかということを楽しみたい、ということです。

私たちは、多くの活動に同時並行で関わっていますが、そんな中で、最終的には平和で、公正で、共生可能な社会をつくりたいということが、根底の思いとしてあります。そして人間というのは一人ひとりが本来面白く、可能性があるため、人間の楽しさ、良さ、可能性には常に期待したいと思っています。

この部分は、活動に参加するなかでいろいろな人たちと共有できていると、私自身は感じています。